



ICP発光分光分析装置。
他のスクラップ業者ではな
かなか見られない「ハイテ
ク」だ

再生塊(インゴット)。数種
のスクラップを配合し一定
成分としたもの



これに対処するため政府は全国各所に死蔵されていた旧軍(旧特別調達庁)所蔵のスクラップ(半製品含む)の払い下げを決めるのだが、合金の「中身」が何か分からなければ適正な値付けができない。そこで、当時「スパークテスト」に精通した数少ない人材の1人だった先代の清二郎氏(現会長、現社長浩一郎氏の実父)に、鑑定役として白羽の矢を立てたのである。まさに「特殊鋼の仕分け人」だ。

「金属クズの成分分析に『スパークテスト』を採用したのは、おそらくわが国では初めてなのでは」と、鈴木氏は父親の偉業に胸を張る。

金属は燃焼の際に独特な色の炎を放つ(炎色反応)。「スパークテスト」はこの現象を応用した識別方法で、グラインダーで削る時に発する火花の色や形状で成分を見分けるわけだ。実は、JIS規格でも認められている「お墨付き」のテクニクだ。

政府からの業務依頼は同社にブラスの副産物をもたらした。1つは特殊鋼の「目利き」に磨きが掛かった

こと、そしてもう1つは業務を通じて大手特殊鋼メーカーとの太いパイプを築いたことだ。これらの武器を引っ提げて、同社は特殊鋼スクラップビジネスでの地歩を固めていくのである。

実際同社の主要取引先には、大同特殊鋼、日立金属、日本高周波鋼業、愛知製鋼、三菱マテリアル、日本冶金工業など、業界の「大御所」が顔を揃える。系列下での取引が主流の業界の中で、同社のように各社と横断的に付き合いを深める業者は極めて珍しい。

蛍光X線分析装置や 原子吸光分析機及び ICP発光分光分析装置まで 備えた自前の化学研究所

一方、鈴木氏は「品質」にもこだわる。「特殊鋼スクラップ」の「キモ」は、要するに「中身」＝成分であるわけだが、さまざまな金属が複雑に混ざり合った特殊鋼だけにその判別は容易ではない。しかし化学的方法でしっかりと判定できれば、「単な

る金属のクズ」は特定の特種鋼の原料として使えるわけで、これはそっくりそのまま付加価値アップへとつながる。ここがいれば同社の商売の核心といってもいいだろう。

「特殊鋼メーカーにとって、『特殊鋼スクラップ』の魅力は、バージン(鉱物から精錬されたばかりの金属)に比べ割安な点が筆頭です。また国内調達、つまり原料調達先が近場にあるということも、融通の良さや『安心感』として有意義でしょう。ただしそれはスクラップの品質が大前提なのです」

と、鈴木氏は強調する。

特殊鋼メーカーにとって安価な原料の確保は競争力強化に直結する。しかし日本ではレアメタルをほとんど産出しないため勢い割高となる。また地金を海外から調達すれば一部には関税も掛かり、コストアップの一因ともなる。また、地金の原料(鉱石)は自然を破壊して産出されるという側面も持つ。

ところで、メーカーが「ニッケル50%、鉄50%」の合金を製造しようと考えた時、「バージン」の地金を